

あたたかいもの やわらかいもの

近江八幡市民病院 村井 弘美

沈丁花の花が好きです。

まだ、寒さが残る舗道に、たった一人取り残されたような気分で立ち止まっている時、ふといい香りが流れてくる。やがて春が来ることに気づきます。

静かに静かに気づかせてくれるところが特に好きです。

かれこれ五年近く病院図書室と駅につながるこの道を、私は大好きな女友達とおしゃべりをしながら、大きな団地の人けのない小さな道を歩いて通勤しています。

突然、花が好きでお茶をたてるのが上手な彼女が腰を屈めて、道端の生け垣に咲いていた花の匂いを嗅ぎました。

「いい匂い、沈丁花、私はこの花の匂いのする頃に生まれたの」と教えてくれました。

あたたかいもの、やわらかいものに年々惹かれていく自分に気づいています。

色々な事柄を経て大人になったというような優しい話ではなく、むしろその逆なのだろうと思っています。

あるがままにと、どんなに心で唱えても、知らず知らずに身につけた自分を守ろう、よく見せようとする厄介な殻から抜け出せない。それならそれで、嘘のまま押し通してしまえばひとつの態度になるものを、生まれつきの器用の乏しさから、今度は人がうらやましくて仕方がない。という具合でどこにいても何をしても不安で仕方がない。結局、自分がないのです。自分がないために起こる不安症、これに二年近く悩まされ、体と心のバランスを失ってしまいました。

ここまで来てしまったら、心を決めるしかない人生の結末を恐れぬ心、困難な人生を行けるところまで行ってやろうとする心、恐ろしくてたまらないけれど、自分のあらゆるものを受け入れて負を正に転換してやろうと、

やっと前向きに考えるようになれました。

春は芽生えの季節。

冬には冬の良さがもちろんあるが、風の冷たさから解放される春の訪れは、やはり幾つになろうと胸躍る嬉しさがあります。

沈丁花の花の匂いは春一番より早く、私の鼻に届いてくるようです。

気持ちだけをあの沈丁花の花の匂いの中に戻して歩き出そうと思います。

冬のおわり 何かのはじまり

